

# 聖書に親しむ

2019年 聖書週間 (11月17～24日)

テーマ：すべてのいのちを慈しむ

2019.11.17  
カトリック中央協議会

〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10  
TEL03-5632-4445 FAX03-5632-4465  
郵便振替 00130-6-36546(宗)カトリック中央協議会一般会計口

## 巻頭言

### 聖書とわたし —大事にしたい3つの要点

カトリック鹿児島教区司教  
フランシスコ・ザビエル 中野 裕明

教皇ベネディクト十六世の使徒的勧告『主のことば』(カトリック中央協議会訳、2012年)から示唆を得た3つの要点についてお話しします。

要点その1—「みことば」と「神のことば」の使い分けを自覚すること

ミサの時、第一朗読と第二朗読の後に侍者は、「神のことば」と唱えますが、福音朗読の後司祭は、「主のことば」と唱えます。それは、「神のことば」はイエス・キリストについての「聖書のことば」であり、「主のことば」はイエスご自身の語った「ことば」を意味しているからです。さらに言うならば、聖書では「ことば」はギリシャ語のロゴスで単数形。「言葉」はロゴスの複数形になっています。わたしたちは日常的に言葉を通して、自分の意志や、考えを他人に伝えますが、神も同じようになっています。「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました」(ヘブライ1・1-2)。

ちなみに、ここで言われている「御子」は冠詞付きのロゴスです。すなわち、「初めに言<sup>ことば</sup>があった。言<sup>ことば</sup>は神と共にあった。言<sup>ことば</sup>は神であった」(ヨハネ1・1)の「言<sup>ことば</sup>」で、わたしたちはこの「ことば」を救い主イエス・キリストと信じ、愛し、礼拝しているのです。

要点その2—「神のことば」はこの世に豊かに蒔かれる

「種を蒔く人」のたとえ話(マタイ13・1-9、マルコ4・1-9、ルカ8・4-8)は、大勢の群衆に向けて語られたたとえの一つです。種とは、「神のことば」です。それらは、良い土地のみとか、蒔く数量とか、効率のみを計算してもくろむ成果主義の形態とは大きく異なります。神のことばは、それ自体に命を宿しているのです。それをどう育て収穫を得るかは、



それを受け取る側にゆだねられているのです。福音宣教の成果に左右されることなく、たゆまなく、かつ、出し惜しみすることなく「神のことば」を蒔き続けることは大事なことだと思います。また、わたしは諸宗教対話の集いで、「放蕩息子のたとえ」を、初めて聖書に触れた仏教徒の方々と分かち合いをしたことがあります。そして、素晴らしい解釈をなさると感心した記憶があります。ひるむことなく蒔くことも大事です。

要点その3—「教会は神のことばの上に築かれます。教会は神のことばから生まれ、神のことばによって生かされます。」

かつて、イタリアで、教会の特徴として、プロテスタント教会は「ことばの教会」、対して、カトリック教会は「秘跡の教会」と呼ばれているのだ、とイタリア人司祭から聞いたことがあります。第二バチカン公会議後、教会再一致運動(エキュメニズム)に加盟したカトリック教会は、聖書に親しむように信者を促すために、このような聖書週間を設けているのだと思います。

上記の文言「教会は神のことばの上に築かれます。教会は神のことばから生まれ、神のことばによって生かされます」(『主のことば』3)は現在の日本の教会にとって、最重要なテーマであると考えます。上記の文言を実現するためには、「神のことば」(聖書)の分かち合いを実践するしかないと思いますし、実際、教会の中で、活発に宣教しているグループは大概聖書の分かち合いをしています。聖書講座などで、講師の司祭から、聖書の解説を承るだけでは、信仰に忠実な信徒が育つかもありませんが、福音宣教をする信徒を育てたいなら、「聖書の分かち合い」が最適だと思います。

## すべてのいのちを慈しむ—神の国はこのような者たちのものである(ルカ18・16)—

長崎教区司祭 湯浅 俊治

2018年11月28日の水曜日、教皇フランシスコはバチカンにあるパウロ六世ホールで、恒例の「一般謁見」に臨んでいました。この日、突拍子もない出来事が起こったことをAP通信（アメリカの大手通信会社）とAFP通信（フランス通信社）はその翌日、世界に向けて発信しました。実はこの日、突然の乱入者があったらしいのです。それも、6歳の男の子で、国籍は教皇様と同じアルゼンチン人。報道によれば、母親のもとを離れて教皇様のいる壇上に上り、教皇警護をしていたスイス兵が微動だにしないことをよいことにちょっかいを出し、それから壇上を縦横無尽に走り回ったのだそうです。教皇様は無邪気なその子の頭を撫でてあげたとのことですが、母親に思いを馳せれば、その恥ずかしさと気まぐさは想像するに難しくありません。すぐさま壇上に上って、教皇様に謝罪し、次のように言ったそうです。「この子は自閉症で、話すことができないのです」と。教皇様は母親に「このままこの子を自由にさせてください」と、そして参加者に向かって次のように言われました。「この男の子は話すことができません。しかし、自分の意思は表現できます。彼は自分の気持ちを表現しています。そして『自由』とは何か、わたしに教えてくれました。この子が話せるように祈りましょう」と。ちなみに、参加者からは拍手喝采だったそうです。

今年の聖書週間のテーマは、「すべてのいのちを慈しむ」です。教皇様は常日頃から、小さないのちを慈しみ、貧しき者たちに心を配り、困難な状況を生きている人たちに視線を向けておられます。しかしながら、世界にはいのちを脅かす戦争や内戦、貧困、難民問題とさまざまな障害が絶えず存在し、そういう中で苦しむ人たちが存在しているのもまた事実です。世界は、どれほどこのことに関心を示しているのでしょうか。こうした状況を少しでも変え、人々が平和で共に生きていける世界にする努力を教皇様は続けておられます。

ルカ福音書は、18章で子どもを慈しむイエスを描いています。イエスに触れていただくために、人々が乳飲み子までもイエスのもとに連れてきます。しかしこの光景を見た弟子たちは、この人々を叱責します。イエスは、弟子たちのこうした態度をたしなめて言われます。「子供たちをわたしのところに来させなさい。『神の国はこのような者たちのものである』」(18・16)と。さらに福音記者は、子どものみならず、貧しき者(6・20)、病に苦しむ者(14・13)にも思いを注ぐイエスの温かさをも描き出します。教皇様は先ほどの男の子が『自由』であると言われましたが、神は信仰をもって自由に生きる権利、平和のうちに助け合って生きる権利を全世界の人々に、特に小さき者たちに等しくお与えになりました。イエスの視線が向けられている方向を、教皇様も同じように見ておられることを思えば、わたしたちカトリック信者も同じ方向を見て、こうした小さき者たちを大切にすることを養いたいものです。また、教皇様がイエスの生きざまを我がものとしておられるように、わたしたちもそれに倣い、彼らを心にとめ、彼らのために祈りながら日々を送っていきたいものです。

今年は教皇様の来日がずっと話題になってきましたが、教皇様を迎えるといっても、それにふさわしい準備が必要になってきます。教皇様は国家元首ですから、国同士の交渉や来られてからの警備など多くのことが求められます。教会としても、来日中の日程に従って、行事や典礼儀式に必要な対応がこれまで求められてきたことでしょう。しかしわたしたちにとって最も大切な準備は、教皇様と同じ心で、わたしたちが日々生活していることです。果たして、来日される教皇様はわたしたちのうちに何を見いだされるのでしょうか。



みことばを深める

## みことばを通して神は今、このわたしに語りかけてくださる

福岡教区司祭 田中 重治

「YOUCAT」、若者に向けたカテキズムです。もともとドイツ語圏向けに編纂されたもので、2011年のWYD（世界青年大会）マドリード大会で、時の教皇ベネディクト十六世が参加した全青年にこの本をプレゼントしたことから世界中に広まりました。しかし、カテケージスの専門家の間では、一つの不安がありました。それは、現代におけるカテキズムの役割を正しく理解していないと、昔のように、カテキズムを学ぶ、用いることが信仰養成であるとされかねないと。実際、日本をはじめ、多くの地方で、そうなっているような。しかし、カテキズムはあくまで信仰養成の道具の一つにすぎません。

昨年開催された若者についてのシノドス。その要点の一つは、若者をイエスご自身と出合わせ、真の友情を培い、そこから人生を選択していくように導くこと。そこで重要なのが、イエス自身の声を聞くこと。これを実現するのが聖書のみことばです。教会の教えの根拠として聖書を切り取ってみていくのではなく、聖書そのものこそ、カテケージスの大切なテキストです。

有名な実践例がC. M. マルティーニ枢機卿がミラノで行ったみことばの学校でしょう。ミラノ大司教区長となった1980年、数人の青年たちから、祈りについて教えてほしいとの願いを受けます。そこで、その年の10月から、毎月第一木曜日にドゥオーモで

開催し、非常に多くの若者たちが参加しました。用いたのはレクティオ・デイビナ（聖書の霊的読書）を応用したものです。レクティオ・デイビナは、聖書の本文を用いて4つの段階、読書、黙想、祈り、観想を経て、イエスの思いを自分のものにしていく伝統的なものです。その上で、みことばの学校では、若者の具体的な現実の問題などをテーマとして聖書の箇所を選び、読書においては、その聖書本文の解説を加えました。また、特に黙想では、若者にとって20分は沈黙を守る必要があることを強調しました。そして、黙想後に分かち合いを加えて、自発的な祈りに導く工夫を加えました。結果、毎週ドゥオーモは若者で満ちあふれ、やがて、色んな教区にみことばの学校は広まりました。

「聖書をいつも手に携えてください。それは、聖書が皆さんにとって、行くべき道を指し示す羅針盤となるためです。聖書を読むことによって、皆さんはキリストを知るようになります」（教皇ベネディクト十六世、第21回「世界青年の日」教皇メッセージ、2006年）。神は、今を生きるこんなわたしに、みことばを通して語りかけ、道を照らしていただきます。老若男女を問わず、一人ひとりをいつくしみ、このわたしが今日をイエスとともに歩み、神の国を実現していくようにと。



# 良書のすすめと読み方

## ①食べて味わう聖書の話 山口里子 著

2018年 オリエンス宗教研究所 1,500円+税

「過越祭の食事は神の前での礼拝であり、男性も女性も子どももみんな一緒に食べるように、昔から教えられていた」——人を創造された神はまず食べ物について教え、イエスはともに食べる喜びを私たちに伝えてくれました。聖書から食べ物をめぐる話題を取り上げ、それらを読み直すなかで聖書との新たな出会いへと導きます。あわせて、聖書時代の伝統料理を再現する36のレシピをカラー写真とともに紹介。教会や学校でともに作り、食べて語り合うことができれば、聖書がより身近に感じられることでしょう。読んで、食べて、聖書を味わう、丸ごと美味しい一冊です。



## ②主日の聖書を読む —— 典礼暦に沿って(A年・B年・C年) 和田幹男 著

2015-17年 オリエンス宗教研究所 各1,300円+税

第二バチカン公会議の典礼刷新によって新たに構成された典礼暦年により、教会はキリストの神秘全体を追憶するために、A年(マタイ)・B年(マルコ)・C年(ルカ)の3年周期で聖書を朗読していきます。本書は各年の主日の聖書朗読箇所にあわせ、その日ごとの中心テーマを理解するためのポイントを見開きで簡潔に説明します。『聖書 新共同訳』の翻訳・編集委員として活躍した聖書学の泰斗である著者が、長年の研究成果をもとにした内容。主の現存を意識しながら、豊かな信仰生活を送るためのさまざまなヒントを発見できる構成となっています。



## ③存在の根を探して —— イエスとともに 中川博道 著

2015年 オリエンス宗教研究所 1,700円+税

天地創造、カインとアベルの物語、アブラハムなど、聖書に記された人間の姿、そして十戒の現代的意義や主の祈り、イエスの生き方をていねいに見つめながら、神との生きた出会いへと読者をいざないます。「天の父との出会い、主イエスとの出会いは永遠に相手を探し続ける中から生まれる出会いであるはず。あらゆる出来事、物事の中で、生きて関わり続けるお方を探し、尋ね続ける生き方の中に祈りの道は隠されています」。カルメル会での40年にわたる著者の観想生活から生まれた本書は、カルメルの霊性に触れ、味わう入門書としても最適です。



## ④聖書に聞く 雨宮 慧 著

2009年 オリエンス宗教研究所 1,800円+税

科学技術の進歩によって多くのことが可能となるなか、現代に生きる私たちはどこかで、人間の理性を研ぎ澄ませて神の意志を求め続けられ、その思いに達することができるかと信じていないでしょうか。神に助けを求めたい、生きる糧を得たいとき、聖書の民は謙虚に、聖書そのものに耳を澄ませました。本書はさまざまな鍵言葉を手がかりとして旧約・新約の関連箇所をたどり、聖書本文を読み解くことで神のメッセージを捉えようと試みます。弱く限りある人間である私たち。虚心に聖書に向き合い、神が与えてくれた生きたことばを聞いていきましょう。



### ◆編集後記◆

今年のテーマは、教皇フランシスコの来日テーマ「すべてのいのちを守るため」に合わせて「すべてのいのちを慈しむ」としました。聖書のことばは「神の国はこのような者たちのものである」(ルカ 18・16)。地球上のすべてのいのちを慈しみ、「このような者たち」がおろそかにされない世界を目指して、みことばを糧に教皇様と同じ方向を見据え、歩んでいきたいと思えます。ご執筆いただいた中野裕明司教様、湯浅俊治神父様、田中重治神父様には素晴らしい文章をいただきありがとうございます。良書をご紹介くださったオリエンス宗教研究所様に感謝申し上げます。ポスターも、「いのちを慈しむ」をイメージしてみました。ご活用ならびに配布いただきたく、今年も注文書を同封しましたので、ご利用ください。

### ◆献金のお願い◆

この「聖書に親しむ」は無料で配布しておりますが、諸経費を含め聖書に関する活動のためにご寄付いただければ幸いです。その際は、下記へご送金くださいますようお願い致します。

振込先： 郵便振替 00130-6-36546 (宗)カトリック中央協議会一般会計口